

善悪裁定拝火神殿 ア  
クワルタ・クワルナ フ  
副題 竜蛇を嘆く 神

オーシャンビューバー太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

藤丸達はブリテン異聞帯を踏破し、次の異聞帯に向けての英気を養っていたが…

「人は醜くなり、人間へと堕ちる。」

「終末の時に蛇神／邪竜は現れる。」

「墮ちる。墮ちる。墮ちる。墮ちる。墮ちる。墮ちる。墮ちる。墮ちる。墮ちる。ただ、墮ちていく。ただ、墮落していく。」

「答えは見つかったか？」

「さあ、人類最後のマスターよ。俺に人間の希望を見せてみる。」

これは、神以上英雄未満の物語でもある。

※特定の宗教関係の話がありますが、その宗教への侮辱等は無いので、そこどころ  
ご理解をお願いします。

# 目次

	くプロローグ	1
	1 節 危機	9
16	2 節 アクワルタ・クワルナフ	1



## くプロローグく

人は醜くなり、人間へと堕ちる。

終末の時に蛇神／邪竜は現れる。

堕ちる。堕ちる。堕ちる。堕ちる。堕ちる。堕ちる。ただ、堕ちていく。ただ、墮落していく。

「答えは見つかったか？」

いいや、見つからない。見つかつてはいけない。

「それはまた何故だね？」

見つかつてしまったては、良い意味でも、悪い意味でも、そこで 終わり になつて  
しまう。だから、もう少し、見てもいいかなつて。

「そうか、それが『答え』なのかもな？」

ははは。そうかもね。

聖槍、  
抜錨

神槍、  
開廷

聖劍、  
抜刀

神劍、  
照覽

魔劍、  
完了

神弓、  
固定

神矢、  
装填



## 「光輪、廻転」

「はっ…あれ、なんかヤバい夢を見た気が…?」

と言うのはカルデアのマスターこと藤丸立香は最悪の目覚めをする。そのタイミン  
グで、

ブーーー!!ブーーー!!ブーーー!!?

そして空気呼んだかのようなブザー。管制室からの緊急集合がかかるので、

「せめてイベントでありますように…」

と小さな願いを持って走る。

もう皆来ていたらしい。何騎かの英霊もいる。いるのは、いつもの可愛い後輩ことマシユ、技術顧問のダヴィンチちゃん、ホームズ、そして呼ばれたのがジークフリート、天草四郎、千子村正、望月千代女だ。

「遅れました!」

というのに最初に反応したのはゴールドルフ所長だ。

「遅い!!とは言わん。私も今来たところだからね。取り敢えずエミヤ君が作ったサンドイッチでも食べたまえ。ホラホラ!!?」

「はい、頂きますから口に積めないで」

「先輩。朝から元気ですね。尊敬します!!?あと、おはようございます。」

とマシユも挨拶をする。ので、

「マシユ、おはよう!マシユもサンドイッチ食べる?」と聞くと、

では、と手を伸ばすので少し空いた口に突っ込む。モゴモゴ言ってる。可愛い。

ちよつと緩んだ空気を止めるのは、

「では、話を始めてもいいかな?」

まあ基本的にホームズだ。

「あ、すいません、どうぞ」モグモグ

と食べながらだけど：

ホームズとダヴィンチは苦笑いをしながら、

「まず今回発見された物は今までで最も恐ろしい。そして、」

ダヴィンチが頭を抱えながら、

「うん。実はカルデアから何騎かの英霊が消失したんだ。」

とんでもない事実だった。

「え、ちょ…：だっ！誰が!？」

「立香君落ち着きたまえ。順番に言っていくよ。今でも信じられない英霊ばっかいないようになった。まず、シグルド、酒吞童子、ダレイオス三世、そしてカルナだ。」

「え…？そ、そんなに…：なん、で…：」

そこでホームズは、

「おそらくだが、精神干渉だろう。そしてその事に知っていそうなミスター・天草もいる。」

とそつちの方を見ると、

「変に胡散臭い笑顔をしている。」

「ははは。それは心の中で思っておくべきですよ。あと私はそんなに胡散臭く無いでしょうに。まあホームズの言う通り知っていますが。」

と笑いながらそう語る容疑者A氏。取り敢えず、

「それはおいといて。(置いといたらいけない気がするけど) 何を知ってるの?」

「まあ、マスターからの命令ですので答えますよ。ホームズの言うとおり私も精神干渉を食らいました。ちなみに私だけ助かっているのは、ルーラーの性質と対魔力が高いお陰です。」

そこで黙っていたジークフリートが口を開く。

「すまないが、それであればカルナヤシグルドは何故だ? 彼ら是对魔力も高く、根本的にも英雄だろう。欲も天草四郎に比べれば少ない。」

と言う質問に皆がたしかに…となる。そこでダヴィンチが、

「多分だけど、土地も関係してると思う。そして次の話だ。今回は、特異点であり、ほぼ異聞帯だ。そして広さは、」

そこでダヴィンチは切って、一度ため息をついてから、

「アジア一帯が変異したんだ。更に言えば、剪定世界が特異点として発生した。しかも、空想樹のようなものも発生してね。」

そこでずっと黙っていたシオンが出てきて、

「そしてトリスメギストスによれば、あと三週間で世界ごと異聞帯になります。」

■ ■ 深度 A

F a t e / G r a n d O r d e r C o s m o s i n t h e L o s t b e l t

善悪裁定拝火神殿 アクワルタ・クワルナフ

副題  
竜蛇を嘆く神

# 1節 危機

— 潜航中… —

「ふう…なんとか着いたね。」

まだ船内にいるとはいえ、ゼロセイルすると達成感がある。

「そういえば天草は残るんだっけ？」

なんかアイマスクつけているエセ神父がそれはずす。めっちゃくつろいどるコイツ。

「ええ、船内の戦力として。いざとなればそちらに助けに行くのでご安心を。」

「先輩、お任せください。今回は私も護衛兼手伝いなので、天草さんに関しては何かあれば止めますよ！」

と胸をはっている後輩。相変わらず可愛い。

まあそれはともかく天草はこうやってふざけてる事も多いが、やるときは120%な結果を出してくれる。そういう英霊というのはわかつてるので、

「うん。宜しく、天草。」

「ええ、お任せを。」

と言う所で…

「御館様、御館様。」

「どうしたの、千代女？」

「いい感じに締まったところ恐縮でござるが、天草殿はまだ何か隠しておりますよ、恐らく。」

その言葉を聞いて、

「え、なんでバレたんですか？あ…」

と割りと素でびびってる。しかも あ…とか言っちゃってるし…

「そんなジト目で見ないでください…言いますよ。」

そこで一度切って、

「マスター。私が此処に残った理由でもありますが、絶対に宗教を聞かれました…

『貴方達と同じです。』と答えて下さい。」

その重要さは目が物語っていた。なら…



「分かった。信用するよ。久しぶりに真面目だったほしい。…じゃ、マシユ、天草。宜しく。まあホームズとかもいるから大丈夫とは思うけどね？」

「はい!!?先輩の方は心強い英霊達が居てくださるのは百も承知ですが、お気をつけて!!」

「おう、マシユ。マスターの事は儂に任せとけ!年長者の意地つてな。」

と安心する声で村正が言う。

「よし、皆、行こう!!?マシユ、ダヴィンチちゃん、ホームズ、ネモ、天草!!行ってきます!!?」

今できる飛びっきりの笑顔で。一度の別れを。

く上陸く

「ここがイランか」

「その様だな。俺はずっとネーデルランドから出た事は無かったが、汎人類史もこのような光景なのだろうか?」

とジークフリートが立香や村正、千代女に聞く。

「いや、昔の日本出身で外の国出れんのは中々いねえよ。ましてや儂なんてただの刀鍛冶だからな。」

「拙者は忍びでしたので…それに甲斐国や信濃国は海もございませんでしたから。」

「む…気が回らなくてすまない…」

「まあまあ…ほらこんなに晴れてるし…」

そして何気なく空を見ると…

「な、」

「な？…つて…」

他のサーヴァントたちも同じく上を見ると、

「「「なんじやこりやあああああああ  
!!!?」」」

『そつちも見えたようだね。』

「あ、ダヴィンチちゃん！」

『うん。おそらくあのおつきい輪から空想樹と似た役割を果たしているっぽい！引き続き調べておくよ。』

「うん。お願い！」

その時、急にジークフリートが村正に目配せしながら剣を構えた。

「どうし…」

そう言いきる前に…

大地が割れた。

「へ?」

光が視界いっぱいになり、

キイイイイン!!? と鳴る。

土煙が立ち、光の方に、そしてジークフリートの方を見ると:

「ジークフリート…?」

そこには鎧が砕け、瀕死のジークフリートがいた。

「クツ…なんとか耐えたが、やはりお互い竜殺しというだけはあるか…いや、もう聞いても狂化されて答えられないか、シグルド。」

「え…?」

ジークフリートの対の位置に立つのは多少見た目が変わってたり、呪いを噴き出しているが、シグルドだった。

「マスター、無事か?…大丈夫そうで何よりだ。」

と、安心させるかの様に微笑み、

「マスター。シグルドの相手は俺が務める。あとで落ち合おう。」

「ダメだよ!そのままじゃ!!せめて回復してからじゃなきゃ!」

と、取り敢えず回復はするが、傷が深く、完治出来なかつた。

「村正、千代女。マスターを頼む。ああそうだ。令呪は置いておけ。そのうち、もつと重

「要なことを使うだろうからな。」

「やっぱり、それでも！つてうわっ!!」

「悪いがマスター。抱えさせてもらうぜ。千代女の嬢ちゃん!!殿を頼む!ありやあ英雄ならではの矜持だ!儂たちが何か言うもんじゃねえ!!?」

「承知!」

「ふう…無事、逃がせたか。まだ、多少は抗えているようだがな、シグルド。では…来い!!?」

「■■■■ー■■■■!!?」

この光景を見た男が二人いた。

片方は

「全く、これだから英雄は、」と怒気を含ませながら、

もう片方は

「流石は英雄。何て」と嬉しげに、

「美しい」

## 2節 アクワルタ・クワルナフ 1

幾らばかり走っただろうか。

「はあつ、はあつ！なんとか逃げ切れたかな？…」

『大丈夫ですか、先輩！？』

「うん、何とか！！…マシユ！？ジークフリートは？」

『すみません…！！あれから反応がなくて…ッ』

「…分かった。でも彼ならきつと、まだ生きてるよ！」

その声に村正や千代女も同意する。

「ああ！！？ありやセイバーの中でもトップクラスで強くて硬え奴だ。簡単にや死なねえ

よ！！？」

「その通りでございます。あの大英雄が負ける筈がございませぬ。」

「うん」

とそこでブザーが鳴る。

「どうしたのダ・ヴィンチちゃん！？？」

『そちらに巨大な反応が150体程近づいている！！？インド異聞帯のマハーナーガみた

いな奴等だけどレベルが今までのと桁違いだ!!魔力や規模だけで言えば、キャスターやアサシンには匹敵している!』

「はあ!?!」

「グルルアアアア!!!」

いきなり二度目の窮地。

数分戦うも…

「おい、ツムカリ一回でやつと2体死ぬとか頑丈過ぎんだろ!?!」

「拙者のおろちでも一回で一体がやつとでござる!?!一旦引いて…」

千代女がそう言いかけた時、

「ハアアアアアツ!!?!」

少女が大盾で頭をぶっ飛ばす。

「先輩!!マシユ・キリエライト、援軍として参上しました!!?!」

「マシユ!!?!ナイスタイミング!!…けど数が…」

そうやって援軍を喜ぶが…

「御館様、後ろ!!?!」

そこには巨大な口を開けたマハーナーガがいた。

「え？」

死ぬ。立香がそれを覚悟した時、一筋の閃光が今まさに藤丸を狙ったマハーナーガを穿った。

「な……」

そしてそれが続けざまに穿たれ、大蛇は絶命した。

「さて、主役はこういうところ来なきやな？」

と藤丸の隣に現代でもユニ○ロで買えそうな服を身にまとった男が降り立つ。だが、その風格がそれを有耶無耶にする。

髪は白く、緑と蒼のオッドアイ。その男は片方の手に光輝く神々しい弓を持ち、もう片方の手には海すらも貫く様な禍々しい槍を持っていた。

「本来ならただの人なんだが、事情が事情だ。仕方ない。」

と言ってニヒルに笑い、こう告げる。

「取り敢えずで悪いが、我が仮の名はバーサク・アルターエゴ！俺の前に立つと言うなら、星すら砕こう!!？」

その声に反応したのか、数百匹のマハーナーガは彼を狙う。そんな危機に直面した彼本人は、

「おい、人類最後のマスターさんだったか？下がってる。契約はねえが命令を寄越せ。<sup>オーダー</sup>



直ぐに終わらせてる。なあに、その方がやる気が出るって話だ。」

立香は困惑しつつも、

「じゃあ…マハーナーガの一扫を…お願い…？」

それに「ハッ！」と笑い、

「了解」

と答え、直ぐさま槍が矢のように変形され、弓につがえられる。

そして、

「陽光よ、月光よ、月光よ、ルナ・ミトラ・ステラ・アーセマーン 星天を割け!!」

その詠唱と共に宇宙へと放たれた一矢は、

「星を、巡っている…？」

そう、まるで矢が生物かのように数多の星を通過し、通過された星が青白く輝く。その

果てに、青白い光が、

「すごい…矢が集まってる…」

そしてそれが地面へと光速を超えて着弾し、

視界は光に包まれた。